

# 猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編

⑦

田宮治

## 極致の止め芸

猪猟の中でも猪止め犬群を使つての単独猪(二、三人猪)ほど奥が深く、極めるのが難しいものはない。それだけに、実戦してみる、と面白く挑戦心もどんどんわき、成果を重ねるにつれてどっぷりと嵌まり込み、単独猪の虜(こいつ)になっていくのだ。

たった一人で大猪を思いどおりに攻めて見事に撃ち獲る極致は、やってみただけでなければ分からない。それは猪猟の醍醐味であり、達成感の極みである。そんな極致の止め猪猟を山彦会千葉支部の若者たちに教えてやりたくて、一緒に奮戦の真っ只中にある。

一秋の目標であった頂点を順調に登って来たが、それを目前にし

て、教材ともいうべき猪が獲り過ぎによって激減してしまい、思いもよらない千葉特有の難題に突き

当たったのである。それは大藪での止め猪に対する寄り付き方法と止め刺し撃ちの技法である。

猪が多ければ逃げられてもまた追って獲ればいいが、犬芸でも猟技術でも失敗から学ぶものであり、繰り返し実践するのが何より良い上達法である。極致の止め芸や至難の止め撃ちまでも、はっきり言えば、繰り返し体験で覚えて出来る上がる成れの果ての大技なのである。

ところが、平成二十二年度は大技を覚えようにも肝心の猪がいなのだ。たまにいる猪は猪猟グループに追いまくられ、とつともなく強く、逃げ足が速くなっている。おまけに獲ってもオス猪は肉

質が悪く、とても食べられる代物ではない。

しかし、一秋でやり残した課題である至難の止め猪対策は、何が何でも推し進めて完成させなければならぬ。こんな時こそ、気持ちが大事になってくる。「負けたまるか!」と気合を入れて実戦に臨んだのは、親方の北嶋氏が刺し止めた次の十二月十九日(日)のことだった。

いつものように千葉に渡る途中の「海ほたる」では、風速は三メートルだったので、海上でこのくらいなら上々で、願ってもない快晴の猟日和である。北嶋氏に「あと三十分くらいで到着する」と連絡を入れる。

私の頭の中は、猪を何としても獲ってやるとの思いが強くなっていて、いつものようにのんびり、

ゆっくり、獲れてよし、獲れずともまた良しの存念までが消えかけていた。

猪が激減した状況下では、猪が獲れなくても仕方ないことではあるが、猪猟はやはり猪を獲ることが上達への何よりの近道である。だから、今日はまず猪を撃ち獲ることを目標に私案を練っていた。

振り返れば、初猟以来一カ月間で味わった未曾有の惨事にけりをつけ、何としても止まらない猛猪に打ち勝つ猟技法を生み出し、使ってみせなければならぬ。

一秋目では親方の北嶋氏にできるだけ任せて、気楽に楽しみながら頂点を目指してワイワイ、ガヤガヤと登って来たが、やり残した二秋目の上級編ともなれば難題ばかりで、とても順調な猟道ではな

い。

そんな難所の胸突き八丁では、先頭に立って今までの私の体験を基軸に思い切り進化・改良の奇策を断行し、そして止め猪猟の一番良い近道である新猟道を構築したと思っていた。

今年には猛暑のせい、餌不足によるものは定かでないが、猟仲間から聞こえてくるのは「猪がない」「獲れない」。しかも「獲ってもオス猪の肉は食えない」という困った状況である。

しかし、山彦会の今ある立場ではそんなことで足踏みしている暇はない。オス猪は減量して、とてもない猛猪と変化している。この戦いに勝つには何よりも大事な戦術を覚えることが先決である。

オス猪が駄目ならメス猪や小物を獲ればよい。とにかく獲れない苦難の現状をふっ飛ばし、どんな状況であっても必ず猪を撃ち獲ること、一段また一段と登り詰めて、順次頑張って獲り続けることが確実に頂点に導かねばならない。

そのために打ち出した緊急対策

こそが、俺（田宮）流の神髄である、しつこく、貪欲に繰り返して、何度でもできるようになるまでやり遂げる。このことが大事な猪猟の上達法である。

私にとって困った時の神頼みとは、いつも体験して覚え、仕上げに使いこなしてきた猪猟道そのものである。「よしよし、ここからは俺が目いっぱいやってみせるから、あと少し頑張ってみて覚えてほしい」と、そんな決意を新たに七時三十分北嶋氏宅に到着した。

### 道の両側に

#### 小物の掘り跡が……

まだ早いのに北嶋家の子どもたちが元気に出迎えてくれる。昨年来、よく猪が獲れて、丸ごと持ち帰って来るのがよほど頭に焼きついていて、毎回出かけるたびに「今日は猪が獲れるかなあ……」と言い寄って来る。そんな

家族ぐるみで取り組んでいる猟気分が私は大好きだ。つい自分の子どもの頃を見ているようで気持ち

がなごむ。

元気を出して大声で「おっ、今日は大猪が獲れるぞ！ 多分オヤジ（子どもたちは北嶋氏をオヤジと呼ぶ）が撃つよ」と返事すると、子どもたちは大喜びだった。出猟の時には、一台一台に手を振り見送るのが常である。

今日のメンバーは、北嶋、板東、平野の各氏と私の四名であるが、思いのほか全員元気でやる気十分である。いつも自分で決めて指示している親方の北嶋氏が「今日はどこをやりますか？」と私に言うので、「先週と同じ所だよ」と空元気を出し、大声で答える。

年の瀬が近いというのに、千葉ではまだ暑く、初秋のように青葉が茂り、紅葉も残っている。前を走る北嶋氏がゆっくり道の右左を見ながら軽トラで走っていたが、やがて止まった。

今日の猟場を取り巻く県道の両側に、一〇〇メートルくらい手前から二、三頭の小物の掘り跡が続いていて、左側に広がる猟場に入っている。

車を止め、全員降りて猪の掘り

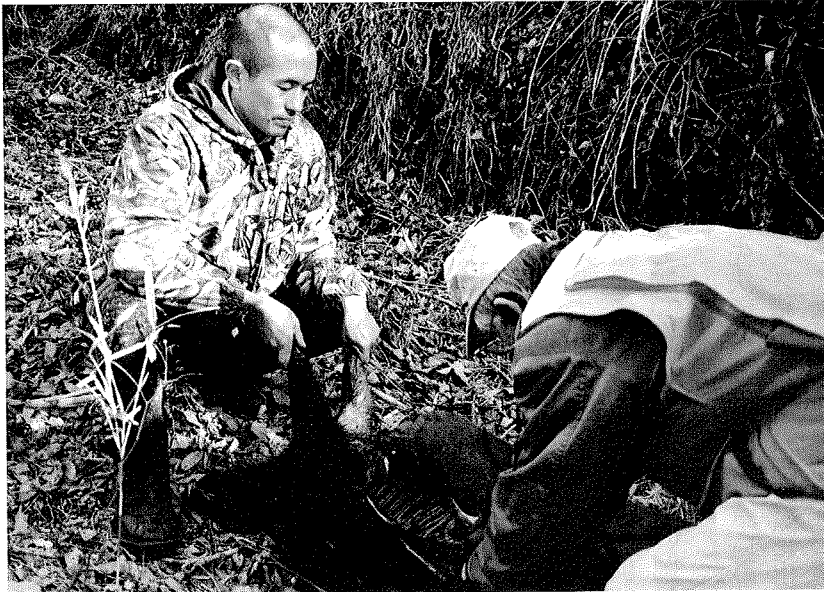
跡を確認し、俄かに活気づく。特に北嶋氏は「二、三頭で、夕べのものだよ」と私を見るので、黙って首を縦に振る。一見すると昨夜であるが、実際は明け方の掘り跡である。

道端だからといって大声は禁物である。まごまごしていれば車の犬たちも吠え出すだろう。五〇メートルくらい走った左側の小道の入り口から今日の猟場である。

やはり一週間で、小物三頭と親猪が戻って来ている。いない所を狩るよりは、小物でも残っているこの猟場を選んで良かったと私は心の中で思っていた。しかし、この猪は追われ慣れて逃げ足が速くなっている。

北嶋氏に、「このまま二人には車を走らせて、いつものタツに向かわせてください。必ず猪は早立ちするから、くれぐれも注意するように告げてください」と言った。私と北嶋氏はすぐ近くに車を止め、二人がタツを張り終わるまで、こんな時の狩り方について話をしていく。

全く同じ猟場で、一週間後に全



加藤氏はいつも解体まで一生懸命であるが、この日はGPSで思い切り追って、見事先回りしての一撃だけに、その思いも楽しさも格別ようだ(加藤氏と平野氏)



凱旋。2発の連射で見事撃ち止めた加藤氏。タニが付こうが血が付こうが、ルンルン気分である。シロ号も猪を獲れば主人と思ひ? 元気だ

く同じ場所にタツを張る意義は、一週間も経てば大抵の猪は同じ寝屋付近に戻っている。どんなに追われ慣れた猪でも大体同じでノテ(逃げ道)に乗って逃げるものである。犬たちもそのことはよく知っている。そのうち犬たちで必ず

勝つ答えを出すだろう。猪もそんな多くの逃げ道はないのだから、追われ慣れた猛猪を撃ち獲るには、同じ猟場を攻め続けるのが何よりも良い猟法なのだと分かっている。

今日の目的は、止まらない猪を

どこまでも追って行き、必ず犬たちに止めさせて、止め猪の極致を猟人にも犬たちにも体験させることで完成させたいのである。

「タツ、OKですよ。どうぞ」と連絡が入る。「よし、出かけるか。猪は近いぞ!」と小声で言いながら、犬たちに「よし、行って来い!」と元気づけて放す。

駿足のブイ号、カツ号、武蔵号の犬群で、小物三頭をどこまでも追って勝負するつもりである。「犬を放しましたよ」と北嶋氏が

タツに連絡しているが、ブイ号たちはぶっ飛んで、前面に広がる笹藪の中に姿を消した。

私は後に続く北嶋氏に「出るぞ!」と告げて、左曲がりに通っている小道を下の大沢に向かって走り出していた。北嶋氏は早くも「タツ注意! 出ますよ」と、猪の早立ちを警戒して注意を呼びかけている。

猪の飛び出しに対応するため、犬たちの入った大笹原の下に回り込もうとするが、その間もなくブ



やっと撮った1枚。分かりづらいが大事な1枚。「猪は度胸で撃つもんや!」。ここから猛猪は一気に突いてくる。その一瞬を刺し撃ちするのだが、慣れば恐ろしさはこたえられない魅力となり、楽しさになり、感激の極致になるものだ。猛猪との睨み合い。猪の目で分かる、突いて出る一瞬。なかなか撮れない1枚である



「完勝! 至福の時である」。北嶋氏が渾身の一撃で決めた逃げ一手の小物。大物とか小物とかの問題ではない。納得の猪が一番心に残る

イ号の寄せ鳴きがある。ほんの二、三分だが、笹藪の中でワン、ワン、ワンとやっていたが、すぐに追い鳴きになった。

案の定、三頭くらいの小物らしく、私のいる大沢には下りて来ないで笹原をぐるぐる回っているよ

うだ。このような状況では、芸のできている犬群なら主人のいる場所か、あるいは止めた車を目掛けて猪を追いつけるものである。猪は回り込むこちらの動きをとくく察知しているようで、ここには来ないなと思っ鳴き声のす

ら離れたいと思っ鳴き声のす

る車のほうに走り出すと、バーン、バーンと二発の銃声が出た。続いて「田宮さん、こっちだ! こっちに来て……」と怒鳴っている。すぐに駆けつけると、車から二〇メートルくらいの所の小道に立って下に広がる大笹原を指差し、「二頭の猪がひょっこりここに顔を出したので撃つが、逃げられた」と残念そうに言っている。

は、たやすく撃てないのも詮せんないことである。正直に言えば、追われ慣れた小物だけに、この一瞬こそがまさに撃ち時で、唯一のチャンスなのだ。が仕方がない。思いやる気持ちで「ここからは仕方ないよ。それで犬たちはどうした」と聞くと、「猪は車の横下を突き抜けて、県道ぎりぎりに、タツとは全く反対側の山を下に向かって逃げていますよ。」



マロ号、シロ号、ヨシ号の咬み止め現場。犬たちも必死で泥まみれの激戦だった。追われ慣れた猪でも、必ず山下の谷川で止め切るのが止め犬の本物の実力である。その猛猪を1メートルから猪の肩口より地面に着弾するように、犬たちを交わして撃つての完勝である。ちなみに散弾銃ではほとんど弾は猪を突き抜けない



まさに猛猪！ 100kg以上の恐ろしく強い猪であったが（実測80kgで、肉質悪く痩せていた）、犬群の猛攻でついに咬み止められた。連射3発でやっと動かなくなったが、私の腕が悪いのではと思うくらい当たっているのに、コケない強さなのだ

ってください。猪はまた回って来ると思うが、突っ走るようだったら車で追ってください」と言い残し、GPSを頼りに県道を全力で突っ走り、犬たちの鳴き声を右下に聞きながら、大きく回り込むように小峰伝いに大沢を目がけて駆

け下りた。

### ブイ号の見事な咬み止め

よし、これでいい。犬たちは三本くらい小沢があるが、北嶋氏と私の間にいることになる。大沢を

境に、この大杉林を車のほうに用心して攻め登れば、どんなに逃げ慣れた猪でも必ず寝屋のある笹藪に戻るか、止められるはずである。

山の下側を注意しながら大沢を見ていると、小物が一頭、真竹藪から飛び出し、大沢を渡り向かいの山にあっという間に消えた。猪の踏み出しかなと思っていると、武蔵号がすぐ後から鳴きもせず凄い勢いで追って来て、大沢の向かいの山で追い鳴きになった。「しまった、あんなに注意して

いたのに何ということだ」と、思いついたように改めて武蔵号を追いかけ始めた。山肌が陰しく、やつのことで大峰に立つが、越えた犬たちを追ってもその先には誰もいないし、道もない大山続きである。

ブイ号とカツ号が相変わらず猪と戦っているようで、GPSはあまり動かない。仕方ない。追って行った武蔵号は、あんな小物なら心配ないだろう。可哀相だが追うのをやめて、カツ号とブイ号のほうに攻め寄ることにした。

小沢を渡り、小峰を二つ越えた大杉林から見渡せる一面に広がる笹藪が、北嶋氏がタツを張っている所のようにだ。凄い大藪で、中に入ってしまうと見通せないのので、よく方向を見定めてどう突破するか思索していると、北嶋氏から「一番さん、取れますか」の無線が入る。

「ブイ号が猪を咬み止めています。すぐ来てください」とのことである。大峰で確認した時もブイ号はかなり遠いので鳴き声はしなかったが、ほとんど動かずに止め切って、一頭で攻めまくっていたのだ。

「よし、分かった。すぐ行く」と言い、私はほっとしてGPSで最短の道をたどって、止め現場に急いで行こうとしていた時、武蔵号が私を追って帰って来た。

北嶋氏は二頭の猪が飛び出て来たと言っていたが、実は三頭の猪が出ていて、その中の一頭に武蔵号が付き、追っていたようだ。私が大峰で武蔵号を最後まで追ってやれなかったの、いつものように戻って来たのだ。

「よしよし、武蔵来い！ よしよし、良くやった」と頭を撫でてやる。武蔵号は残念そうに笹藪の中で懸命に猪を探している。「よしよし、来い来い」と呼びながら、県道を横切って反対側の大杉林に分け入ると、杉林のあちこちには猪の掘り跡だらけである。

もう近いので大声で「どこだ！ オーイ」と叫ぶと、大杉林の小沢に広がる笹竹藪の中から「ここだぞ！」と北嶋氏の元気な声が返ってくる。なんとそこは、車から直線距離にしてわずか四〇〇メートルの所で、今朝、県道の両側に猪の掘り跡を確認した反対側に広がる笹竹の大藪だった。

この三頭の猪は毎週追われていて、いつもは今日張った大沢のタツに逃げるのだが、追われ慣れたことで、大沢から少し離れたこの場所に住屋を移動していたのである。今日は逃げの一手の猪に絶対負けぬ早い足で犬群にしたのが決め手となった。猪は小回りを繰り返した後、撃ちかけられて逃げてもまた追って戻され、ここでブイ号に咬み止められたことにな

る。小物といっても十分な大きさの猪であり、この藪中を逃げの一手なのだから並の犬芸で咬み止められるものではない。今日はそんな追われ慣れた猪の対策について犬たちから教えられた。

ちなみに犬芸が一流でありさえすれば、主人がどうしようかと迷う難題でも、頑張ってさえいれば必ず犬たちがきっちり結果を出して教えてくれる。今日の結果は、まさにそんな学ぶべきことの多い猪猟で、頂点にまた一段駆け登ったのである。

うれしくて大声を張り上げながら笹竹原の止め現場にたどり着くと、北嶋氏が猪に咬み付こうとするブイ号を必死で抱き寄せ、褒めていた。もうタツにも連絡してくれたよう、大急ぎで写真を二、三枚撮り、すぐ引き出しにかかった。藪中の登りではあるが、引き出した所が県道で、三〇〇メートルもない所に車が止めてある。カッ号と武蔵号が咬み付いて邪魔するくらいで、何事もなく車に横付けできた。タツの二人は置き去りにあ

たようなものだが、それでも獲れたことを喜んでくれている。私はどんな大物を獲ったことよりも、予定どおりの戦いや予想以上の成果が出た要因が明確に分かったのがうれしかった。「よし、これでいい。次はこの親猪と戦ってやる」と、私は密かに心に誓った。

「小猪をブイ号が咬み止めた」という、ただそれだけのことが、どんな大猪を撃ち獲ったことよりもうれしいのは、何度も藪中の小物に巧妙な一手で逃げられていた中で、猪止め対策に犬たちが明確な答えを出してくれたことと、北嶋氏が藪中の止め猪に見事な寄り付きができたことである。

ブイ号の咬み倒しで、止め刺し撃ちができなかったのを除けば、推し出した当面の課題は、今日また一段を確実に登った。後はこの戦い方を忘れず、繰り返し実践することで猪猟技術の精度を高め、犬芸を極め、猪猟道の活路を開き、大切に守り育てて成長させて次世代に繋げていきたいのである。(つづく)